特集

下田市景観計画を見つめ直す

下田の「まち」の成り立ちを考える

新しい「下田市景観計画」を考えていく際に、重要な点となるのが市内をどのように「エリア・区域分け」を行っていくかです。下田は美しい海岸線、歴史的建造物の所在する旧下田町、伊豆急下田駅設置後に区画整理が進んだ市街地、下田の奥座敷と呼ばれた温泉街、田園風景が広がる里山など、市域に様々な「まち」の特徴を持っています。それらは時代の変遷と共に成立し、現代まで受け継がれてきた各地域の特色であると言えます。こうした特徴を改めて整理し、次の世代へと受け継いでいくために、下田の歴史を振り返り、現在に続く「まち」の成り立ちについて考えてみたいと思います。

▶ 考古

下田における人々の生活の営みは、古くは8000年前の縄文時代早期の土器が出土した須崎の爪木崎遺跡や田牛の上の原遺跡から見ることができます。その後、縄文時代前期・中期・後期と各時期の遺跡が出土し、吉佐美の田京山台地、柿崎の上の山台地、河内の湯原遺跡、稲梓の宮の前遺跡のような山麓に大きな集落が形成されていたと考えられています。

▶ 古代

大宝元年（701）に国郡制が導入され、伊豆国は田方・仲（那賀）・賀茂の3郡が置かれ、賀茂郡家（郡役所）が現在の南伊豆町下賀茂辺りに設置されたと考えられています。平安時代（794～1185年）中期に編さんされた『和名類聚抄』によると、賀茂郡は、賀茂・月間・川津・三島・大社の5郷がありました。賀茂郷は、現大賀茂地区、南伊豆町上賀茂・下賀茂地区にかけての地域を指し、月間郷は、現田牛・吉佐美地区、南伊豆町手石・小稲・湊・青市地区、川津郷は、現河津町から東伊豆町にかけての地域で、三島郷は、三宅島・神津島などの伊豆七島、大社郷は、当時三島神を合祀していた白浜神社に由来する郷名で、現白浜地区を中心に、稲梓・稲生沢・浜崎・下田地区を含むと考えられています。また、稲梓地区については、平城京二条大路で出土した天平7年（735）の木簡に「賀茂郡稲梓郷稲梓里」の表記が見え、稲梓の地名が奈良時代には存在し集落として成立していたことが判明しています。

▶ 中世

現在の河内地区、重福院に所在する宝篋印塔（県指定文化財）には、建立した人物として「沙弥智道」という人の名が刻まれています。このような格調高いものを建てられる地域の有力者の存在は、河内の集落が成立していたことの裏付けと言えます。こうした村落の形成が、田牛地区をはじめ、下田・横川・相玉・落合・白浜などほとんどの村落名を地域の有力者と共に文献上で確認でき、現在の市内各地域につながる村の形成が最も進んだ時期であると言えます。

また横川地区では、水神社から市内最古となる文和4年（1355）の棟札※1が見つかっており、同じく日枝神社には南北朝時代（1336～1392）に造られたと考えられる和鏡が残されていることから、集落として早い時期に発展していたと推測できます。このように、南北朝・室町時代には、市内各地域の動静を文献等で知ることができます。

中世の各地域の動静

稲梓地域	市内の室町・戦国時代の棟札の半数以上が所在。 稲生沢川上流域の安定した農業生産力を背景に、中世における下田の１つの中心。 地域の棟札の大半が横川地区に集中し、この地域の早期の発展と重要性が見られる。
稲生沢地域	河内 向陽院　：永正17年（1520）の棟札 ※「豆州稲生沢郷」の初見。 諏訪神社：永正15年（1518）の棟札　八幡神社：南北朝・室町時代の和鏡
浜崎地域	外浦 八幡神社：天正16年（1588）の棟札　須崎 両神社：平安・鎌倉・室町時代の和鏡 観音寺：平安時代の仏像
朝日地域	大賀茂：大賀茂走湯神社 天文10年（1541）、永禄６年（1563）、同11年（1568）の棟札 吉佐美：吉佐美八幡神社 永禄３年（1560）の棟札
白浜地域	伊古奈比咩命神社に平安時代の記録

▶ 近世

下田町の発展と共に、その周辺の農村部と沿岸部から「まち」が構成されていきました。下田町は、天正18年（1590）に領主戸田忠次が下田奉行として配置され、奉行所などの公的機関を中心に「まち」の整備が進み、碁盤目状の町割が成立しました。現在、旧下田町の道路が格子状に配置されているのは、この頃に整備された町割を維持しています。

※1 建築の棟上げの際に、工事の由緒や年月日、建築者などを記入して棟木に打ちつける木の札のこと。

▶ 幕末

江戸時代を通じて「風待ち湊」として発展し続けた下田町でしたが、安政元年（1854）11月4日に発生した安政東海地震とそれに伴う津波により、壊滅的な被害を受けました。ある史料では、町内の9割超の家屋が全壊流出の被害を受けたとされ、下田町の街並みは崩壊しました。地震発生の2年後に下田へ来航した、初代駐日アメリカ総領事タウンゼント・ハリスが記した『日本滞在記』によれば、当時の奉行所の役人が「下田は非常に貧しい土地で、未だ安政元年の地震の影響から回復していない」と話したと記録しています。下田町民は被災後、再び同じ町内に「まち」を再建し始めましたが、震災前に800軒超あった住居は、この時点で300軒ほどしか再建できていなかったとされ、柿崎地区の玉泉寺に米国領事館が設置された安政3年8月以降に描かれたとされる絵図においても、町内には多くの空き地や、建築資材が置かれた現場なども確認でき、下田町の復興はかなりの時間がかかったと考えられます。その後、どのように「まち」を復興していったのか、詳細を確認する資料等は残されていませんが、江戸時代に成立した町割をもとに「まち」を再建し、新しい時代へと進んでいくこととなります。

▶ 明治～現代

江戸時代に1町28村で構成されていた下田の「まち」は、明治22年（1889）の市制町村制の施行により、下田町・稲梓村・稲生沢村・浜崎村・朝日村の1町5村に再編されます。（のちに明治29年（1896）浜崎村から白浜村が分離。）その後、下田の産業の発達と共に、現在の下田市へとつながる「まち」の整備が進められていきます。昭和30年（1955）に1町5村が合併し下田町となり、昭和46年（1971）に現在の下田市となります。

明治22年（1889）の合併

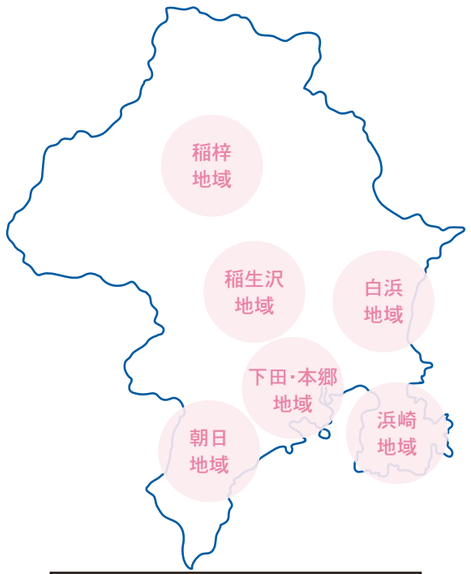
下田町・岡方村	柿崎村・須崎村・白浜村 ※明治29年（1896）白浜村分離	吉佐美村・大賀茂村・田牛村
→ 下田町	→ 浜崎村	→ 朝日村

立野村・大沢村・蓮台寺村 河内村・中村・本郷村	箕作村・須原村・落合村・宇土金村 椎原村・荒増村・加増野村・横川村 相玉村・北湯ヶ野村・堀ノ内村
→ 稲生沢村	→ 稲梓村

歴史から考える下田の「まち」の成り立ち

下田の「まち」の成り立ちについて考えてみると、古くは縄文時代より始まった人々の生活が、その時代時代の人々の生活において少しずつ「まち」が形成され、今私たちが暮らす現在の「まち」へとつながっていることが分かります。海に面した地域では、これまでに海と関わってきた中で生活様式や文化を形成し、また里山では農業との関わりの中で同じく生活様式や文化を形成してきています。時代が進み、「江戸」という巨大な「まち」の成立と共に大きく発展した下田町は、その後の時代の変遷に翻弄されながらも現在までその町割を残し、地域の生活や文化を現代に伝えています。このように現在の各「まち」の特徴を捉え、さらにその背景にあるこれまで伝えられてきた歴史や文化も踏まえた上で、私たちは自らが暮らす「まち」を考えることが大切です。

こうした整理のもと、新しい「下田市景観計画」では、右のように「エリア・区域分け」をしたいと考えます。各地域の「まち」の特徴を背景に、これからどのような「まち」づくりをしていくのか、景観計画を見つめ直すことで、これから考えていきたいと思います。



現在想定する新しい景観計画でのエリア分け